

伊勢物語「狩の使」考

上野理

本稿は、伊勢物語六十九段「狩の使」の特異な方法を指摘し、それに関連させて、伊勢物語という名称の意味を考察する。

著名な物語であるので、本文の引用は省略する。この「狩の使」も主人公を無名の「男」とし、「昔、男ありけり」という、民間伝承の冒頭形式をかりながら、虚構の物語を展開する。この発話形式は、本来、悪神や逆賊や名もない庶民を物語の主人公としたときに使用するもので、主人公を著名な貴種とはせず、反逆する名もない「男」として物語るのは、作者のなみなみならぬ意欲をうかがわせるものである（『伊勢物語へ昔、男ありけり』考）『文芸と批評』昭44・5）。「狩の使」にえがかれた恋の冒険は、神をも法をもおそれぬもので、この発話形式にふさわしいものであるが、勇敢なのは斎宮であり、主人公の「男」はむしろ受動的であり、彼が主人公であることを忘れさせるほどである。作者は彼に勇敢な行為を求めてはいないのであろう。物語にそってみておくことにしよう。

二日目の晩、斎宮は、月のおぼろなおり、「小さき童を先に立てて……人を鎮めて、子一つばかりに、男のもとに來たり」とい

う。そして翌朝も、「男」は、「いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば」と躊躇していると、斎宮の方から

君や来し我や行きけむ思はず夢かうつつか寝てかさめてかというきぬぎぬの歌がおくられてき、「男」は今夜またあいたいと返歌をする。その夜は国守の訪問があつて逢えず、狩の使の三日という滞在期間が過ぎて、翌日「男」は去っていくが、その悲しみも、まず、斎宮が

徒歩人の渡れど濡れぬえにしあれば

という連歌をうたいかけるのである。「狩の使」の「男」は、女に愛される美点をそなえていたのだから、その記載はない。「男」は一度、「われてあはむ」といっただけで女の心をつかむのである。この物語の主人公は「男」であるから、斎宮の行為をあまりに重視し、彼女の禁じられた恋の苦悩や人間回復への志向をテーマとみてはなるまい。

「君や来し我や行きけむ」の名歌について、窪田空穂は、『伊勢物語評釈』（昭30・9）に、「後朝の歌としての斎宮の贈歌は、かりそめながら初夜を経た処女の、一躍、情炎その物と化したか如

きもので、一見不自然に似ているが、自然である。業平の答歌はむしろ押されている」と評している。業平の答歌はいうまでもなく、「男」のよむ

かきくらす心の闇に惑ひにき夢現とは今宵定めよ

の歌である。空穂の斎宮の歌を評する「かりそめながら初夜を経た処女の、一躍、情炎その物と化したが如きもの」という言葉は適切であり、業平の答歌を圧している。この物語は「男」を小さく、斎宮の行為を大きく描いているのであり、作者の意図が不思議な恋に遭遇した「男」の体験をかたることにあったことを思わせるのである。

本稿は、「狩の使」を虚構とみる立場で論述をすすめてきた。物語の最後にしるされた「斎宮は、水尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹」といった注記を後世のものとみて無視し、「狩の使」は業平と斎宮との恋を物語化したものでもなく、まったくの創作であり、斎宮の歌も、世間を知らぬ若い斎宮の歌としては、あまりに恋になれすぎ、うまくできすぎた感をうけるので、若い女の作ではなく、作者が物語のテーマにあわせて創作した歌であらうと想像するのである。

もちろん、「君や来し」と「かきくらす」の贈答が、「業平朝臣の伊勢の国にまかりたりける時、斎宮なりける人に、いとみそかに逢ひて、またの朝に、人やるすべなくて、思ひをりける間に、女のもとより、おこせたりける」の詞書で、よみ人しらずと業平の歌として古今集に採択されているのを無視するものではない。「徒歩人の」と「また逢坂の」という唱和も、まえの二首ともど

も、雅平本業平集や在中将集におさめられており、「狩の使」の所載歌は、古くから、業平とよみ人しらずの歌として考えられてきたことも認めねばなるまい。古今集がこの両首をよみ人しらずと業平の贈答とみていることと、その詞書が「狩の使」と同趣の作歌事情をつたえていることは、尊重する必要があるが、それが事実であるかいなか、古今集をどの程度信用することができるとなると、業平を信じる場合とよみ人しらずや詞書を信じる場合とでは、おのずから相違があるはずである。古今集が業平作としていることを疑うことは容易ではなく、無意味ですらあるが、よみ人しらずと業平の贈答歌と詞書は業平側の資料から採集したと考えるのが自然であらう。つまり、原伊勢物語や原業平集を資料にしたとみるわけだが、すでにそこに虚構があった場合、撰者たちがそれにだまされ、あるいは、創作は勅撰集の資料にはしないという原則がまだ、確立していなかったために、虚偽であることを知りつつ、黙認することもあったと考えられるのである。一切を虚構とみ、両首を業平の作とすることは不可能だろうか。

「狩の使」において明らかなのは、「かきくらす」の歌人が業平であったということだけであり、この物語を虚構とみ、斎宮の歌の作者を推測したりするのは、不可能のように思われようが、まったく手がかりがないわけではない。歌も物語も元稹の会真記（鶯々伝）の影響を濃厚にうけ、「狩の使」はその翻案と考えられる事実があるのである。

「狩の使」と会真記の類似は、すでに目加田さくを氏が『物語作家家園の研究』（昭39・7）に指摘しており、本稿もその点に関

して多くを加えるものではない。目加田氏は会真記の主人公張生がたまたま普救寺でいとこの鶯々に遭遇したこと、鶯々が侍女紅娘をさきにたてて張生の寝所をおとずれたこと、そして「終夕一言なし」というありさまで別れ、翌朝張生が「あにそれ夢なるか」と疑ったことなどに伊勢物語との類似をみているが、すべて承認してよいであらう。

物語にそつて会真記との類似をさらに具体的にみておくことにしよう。まず二人のであいであるが、会真記では、おばが戦乱のなかで張生に助けられたことを謝して宴をはり、子供たちをして「今、仁兄の礼を以つて奉見せしむ」といい、一七歳の鶯々にていねいなあいさつをさせる。これは、伊勢物語で親が「常の使よりは、この人よくいたはれ」と命じたことと呼応する。張生が鶯々をさそうと、いちどはげしくはねつけながら、侍女をさきだてて張生をおとずれる場面の類似はすでに目加田氏の指摘するところであるが、この場面は細部にわたる類似がある。鶯々が張生をはじめ拒否したのは二月一六日、彼の寝所にいったのは一日おいた一八日で、会真記は「この夕、旬有八日なり。斜月晶熒にして幽輝半床」と描写するが、伊勢物語で、「小さき童を先に立てて人立てり」という斎宮のおとづれた夜は、「二日といふ夜」の「月の朧なる」時であり、春という季節も、二日目という日程も月光も一致している。つづく会真記の「頃ありて寺鐘鳴り、天將に曉けんとす……終夕一言なし」は、「子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬに帰りにけり」とほぼ同文。翌朝張生は、「自ら疑つて曰く、あにそれ夢なるかと」と疑い、べにや移

り香に事実であつたことを認識するが、伊勢物語も「男」に「つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば」という疑問と逡巡を与える。諸注は「いぶかし」について「きがかり」「不安」あるいは「心ひかれるさま」と解しているが、「いぶかし」は「きがかり」とはいっても「様子が知れずきがかり」の意味で、「疑問」「不審」の意を有している。この場合は相手の真意を疑うというよりも、斎宮の「夢か現か寝てかさめてか」の疑問に関連させて、会真記の「自ら疑つて曰く、あにそれ夢なるかと」の意味に解するべきであらう。伊勢物語は張生の疑問を「男」と斎宮に分担させたのである。分割した理由は、「狩の使」の作意に関連させて考察する問題となるが、会真記との類似は、たんなる類似にとどまるものではなく翻案というべきものであるうし、斎宮の歌にも会真記の影響が認められる以上、歌は物語とともに創作されたことになり、歌と物語の作者は同一人となり、「男」の歌を古今集にしたがって業平の歌とすると、斎宮の歌も「狩の使」の物語も、業平の作品と推測されてくるのである。

張生と鶯々の親しむ場所は西廂であり、のちに西廂記に継承される著名なものだが、「男」の部屋も西廂にあったようだ。角田文衛氏は、御巫清直の原因をもとに、斎宮寮内の殿舎を想定復原し、「おそらく彼の寝所は、（御殿）（斎王の常の御座所）に隣した西庇に設けられたであらう。恬子内親王の御座所は、月水の時以外は寝殿（母屋の塗籠）であつた。西庇は寝殿と相近く、御殿を距てゝ接続し、女房たちの曹司からやや離れていたから、恬子内親王が深夜ひそかに業平に忍んで来るのは、割合に容易であつ

たに相違ない」(『紫式部とその時代』昭41・5)と推測している。角田氏はこの六十九段の記載をすべて事実とし、この物語は業平と恬子の情事の記録であるとみる立場から、「彼らが情を交したの……貞観七年十月中旬のことではなかったか……貞観七年十月十五日は、太陽暦では西紀八六五年十一月十一日に当っており、むしろ肌には快い季節であった」という愉快な考証を熱心にしており、本稿とはその立場をことにしているが、西庇という指摘は貴重である。

会真記と「狩の使」の類似は、種々の面におよんでおり、もはやたんなる偶然の一致としてみすこすことはできない。会真記伝来についての所見はなく、目加田氏も、「但し、驚々伝は、現在書目録にはみえていないが唐の代表的艶情類伝奇であるから或は留学生の口伝誦承があつたのではあるまいか」と推測するが、惟喬親王や業平の遊ぶ水無瀬離宮の「渚の院」は白染天が元稹をしのんだ「渚宮」の名にもとづくものであろうし、伊勢物語に白染天や元稹の詩の影響の認められることは、すでに、「伊勢物語所載歌考」(『文芸と批評』昭42・3)・「伊勢物語へあづまくだり」考(『文芸と批評』昭43・7)・「伊勢物語の藤と蟹」(『東洋文学研究』昭44・3)にのべたところである。会真記伝来の所伝がないという理由から、元稹の自伝小説といわれる会真記の影響を認めるのをためらう必要はあるまいと思う。

「狩の使」が会真記からうけた影響は、物語の種々の面におよんでいる。この物語が禁断のはげしい恋を描きながら、愛の讃歌をかなでるものでも、人間性の解放を主張するでもなく、ただ不

思議な恋の顛末と実らぬ恋のあわれさをのべるにとどまるのも、この物語が唐代艶情小説を模倣したものだと考えたとき、理解することができるのである。遊仙窟や会真記のように、「狩の使」の作者も、自分の特異な恋の体験をしるそうとしたのである。「男」があたかも事故にあつたかのように不思議な恋を経験するのも当然である。作者の作意も方法も翻案という面より考察してよいであろう。歌人たちが古来の和歌の類型的な心や詞をきらい、詩文をとりいれることで和歌の新生を意図し、ある程度の成果をあげ、古今集の歌風を形成したように、伊勢物語の作者も類型的な古来の歌がたりを不満とし、中国艶情小説の題材と趣向をとり、新作の歌物語を創作したのではないだろうか。創作としての主張は、翻案という面が重視されて微弱であるが、古来の歌がたりとは、ある個人の創作という点で大きくことなり、主題や方法においても古来の歌がたりと類例をみることはできない。

袋草紙は、「狩の使」を巻頭におく伊勢物語の存在を伝えている。「初冠」を初段とするのとはちがってなにか理由がなければならぬ。後人が伊勢物語という物語の名称にあわせて伊勢の物語である「狩の使」を巻頭にすえたという場合も考えられないではないが、それにはさきに、伊勢物語という名称が「狩の使」の六十九段とは無関係に名づけられていたことが証明されねばならないだろう。「狩の使」が巻頭におかれたのは、作者がこの段を一番最初に書いたとか、作者なり編者なりがこの物語になにか特別な愛着をもっていたためと考えるのが自然であろう。伊勢物語は詩文の影響を濃厚にうけ、とくに「昔、男ありけり」ではじま

る物語にその傾向が強いが、「狩の使」はさらに会真記の影響をなまのかたちで残し、唐代小説の主題を再現している。自己の珍らしい恋の体験を三人称でのべる艶情小説の方法を伊勢物語は採用したわけだが、「男」を静止させて斎宮に行動させる手法までをまね、唐代小説を歌がたりに導入したおりにおこる変化は少く、翻案をぬけて独自の世界を構築するにはいたっていない。

たとえば、「昔、男ありけり」という発話形式を採用し、自己を無名の「男」とし、法をも神をもおそれぬ男を描く余地をのこしながら、会真記にひきづられて不思議な恋の遭遇者におわり、九段「あづまくだり」に登場する（自分を有為の人材とさげぶ中国の貴種の存在を明確に意識したうえで）無用者の自覚をもったやさしい「男」のような、独自の個性を与えてはいない。「狩の使」は唐代艶情小説の影響が濃厚であり、二条後の登場する物語や、「あづまくだり」を創作する原点をしめすこととであり、初期の作品と考えてよいであろうが、つぎに伊勢物語という名称と「狩の使」との関係を考え、再度、この問題を考察することにした。

× ×

伊勢物語の名称は、その意味も、またそれがいつ、だれによって与えられたか、全体に対する名称であるのか、ある一部分だけをさすものであるのか、一切が不明であり、定説をみるにいたっていない。

もともと古い研究として袋草紙は、「伊勢物語」の名称について、「その名目二義あり」といい、

密事あるの故に、僻事と称するたのよしにて、伊勢物語と号す。諺に伊勢は僻言の故なり。一には、斎宮の事を詮となす故に伊勢と号すと。これ正義か。和泉式部本は斎宮の事を以つて、もつとも先に書く。

とべている。一説は、斎宮や后との恋を書いているので、「僻事」という必要があり、「僻事」の意味をもつ「伊勢」の名をえらんだというのであろう。「僻事」とは、「道理にはずれたこと」「あやまり」「うそ」を意味する言葉であるが、この種の遠慮をするのは作者であらうか。「へんなはなし」とか「フィクション」の意味で彼はその作品を「僻言」と考え、その意味をもつ「えせ」と近い音の「いせ」を採用し、伊勢物語となづけたことになろうが、作者はなにに対してその作品を「僻言」と感じ、「僻言」を意味するいくつかの言葉のなかでとくに「えせ」をえらび、そしてそれをさらになぜ「伊勢」という地名に変えたのか、議論の余地を残している。

他の一説は、斎宮の物語に重点がおかれ、「狩の使」が巻頭にあったためとするものである。「狩の使」がはやい時期に書かれ、伊勢物語執筆の原点といえるものとどめていることはすでにのべた。この一説は、認めてよいものであるが、会真記を翻案するこの物語が、恋の場を寺院の西廂とせず、なぜ斎宮とし、伊勢国をえらんだかを考えていくと、「えせ物語」という名称との関係も捨てがたく、伊勢物語という名称故に、斎宮との恋が語られたのではないかと考えられてくるのである。「狩の使」でみせた不思議な恋物語を創作しようとする態度は、自己の作品を「へ

んはなし」^{「フィクション」}とし、「僻言」と評する態度と共通して矛盾しない。袋草紙の両説は、二者択一をすべきものではなく、あい関連させて考察をふかめる出発点を提示することくである。

まず、前説の「僻言」がなにに対して「僻言」を意識したかを考えることにしたい。經典とか史書に対してとみることも可能であるが、いま「狩の使」に問題を限定し、その翻案を重視するならば、作者の「僻言」の意識は、古来の歌がたりを正しいものとし、事実として語る有用な歌がたりや伝誦に対して、「へんはなし」虚説であると謙遜し、新しい物語の創造に相応の自負を認めていると考えるべきであろう。ついで「僻言」の物語が「えせ物語」を中継としてなぜ、伊勢物語という名称をとったかを考察したいが、類似した作品に大和物語があり、同様にその名称の意味が不明であることも忘れてはならない。両者は内容・形態においてもっとも類似し、同様に伊勢・大和という国名を名称とし、ともにその名義が不明であるのはけして偶然ではあるまい。おそらく、その名称や命名のしかたには、従来、研究者のみすぐしてきた何らかの関連が存在し、一方を解決したものは、両者の名称の正しい意味を知ることになるのではないだろうか。

大和物語について袋草紙は、「その名目は和語の由か」と推測している。「和語」とは、たまたま目にふれた

松容として奏事を曰し、和語に及び、須臾にして命じて曰く。和歌は我國の習俗、世治まれば則興る……

(後拾遺集目録序)

近日また和語を学び、詠するところの歌、わづかに兩三に過ぎずといへども、風情幽玄に入る……(玉葉文治4・2・20)
右の二例によると、目録序は、撰者通俊が白河天皇に政務について報告し、話題が「和語」におよんで、天皇が後拾遺集の編纂を命じる記事であり、玉葉は、兼実が良通を失った悲しみをのべる文中で、「文章」や「詩句」に対立させて「和語」を使用しているのので、ともに「和歌」の意味と考えてよからう。清輔は、大和物語は「和歌物語」つまり、「歌物語」「歌がたり」の意味で命名されたと推測したのである。

歌がたりや歌物語をなぜ大和物語と名づけたかを考える場合も、本稿は、大和物語と伊勢物語の名称は類似しており、大和と伊勢は国名であり、命名のしかたに何らかの関連があるうという漠然とした予測に拘泥し、大和に「唐」に対する「日本」や「大和魂」や「敷島の道」の意味を認めて解決をいそぐことはしない。大和国の物語を語っていたために大和物語とよばれたというような大和国に関連させた解釈は不可能だろうか。まず、歌がたりの実態を認識する必要があるであろう。

伊勢物語は古来の歌がたりに対して新しい歌物語を創作したものであるとのべたが、平安朝初頭の当時の歌がたりの実態は明瞭でない。大和物語は実際に語られていた歌がたりを記録したものであるといわれているが、その歌がたりが一般的なものであるのか、特殊なものであるのかも十分に論じられておらず、伊勢物語の時代の歌がたりを大和物語の多くの物語のごときものと断定することはできない。たとえば、大和物語には、宇多法皇をめぐ

る後宮サロンの構成員がしばしば登場し、彼らに関する歌がたりが多数をしめている。その成立は、天曆五年（九五〇）のころと考えられているが、歌がたりとは大和物語にみるように、本来、同時代あるいは一世代前の、話者（あるいは伝誦者）や記録者（あるいは作者）に親しい歌人にまつわる逸話を語り、記録するものであったのだろうか。伊勢物語は「昔、男ありけり」と時を「昔」、登場人物を無名の「男」とするが、歌がたりにおいてどちらが一般的であり、どちらが特殊であったのだろうか。

大和物語にももちろん伊勢物語のように、時を「昔」とし、登場人物を無名人とする物語がないわけではない。百四十段までを第一部、附載説話をのぞいて百七十三段までを第二部とする通説にしたがって大和物語を区分すると、

147 150 151 152 153 155 159 160 161 162 163 164 165 166 168 173

右の一六段に宇多朝以前の歌人が登場する。すべて第二部に属しているが、登場人物が伊勢物語のように無名であるのも

7 55 59 87 88 129 130 147 148 149 150 154 155 156 157 158 169

右の一八段が存在するが、百四十段以後の第二部に集中している。伊勢物語が模倣し、かつ反発した当時の歌がたりは、大和物語第二部のごときもので、第一部の話者に親しい同時代の歌人にまつわる逸話を語る歌がたりは、歌がたり本来の姿をつたえているとすることには疑問を残している。

大和物語の名義を考える途中で、大和物語のなから、伊勢物語の作者が目にし、参考にした歌がたりを発見する作業をはじめたことは、なにか、わき道にそれた印象を与えるかもしれない。

伊勢物語・大和物語を密接なものとする本稿では、伊勢物語の「ひがごと」の意味を明らかにすることが、大和物語の名義を知る一歩となり、ひいては、伊勢物語の正義を知ると考えるわけだが、大和物語の所有する古来の歌がたりが、いかにも大和物語の名にふさわしいものであることを、明示しておきたいと思うのである。

大和物語第二部三四段には、宇多朝以後の歌人が登場する章段（141 142 143 144 145 146 170 171）も混在し、宇多朝を遠くへだてるとはいえぬ、業平（160 161 162 163 164 165 166）や遍昭（178 173）や黒主（172）の登場する章段も少くない。当面する問題にあわせて、伊勢物語以後の歌がたりを除外していくと、「奈良の帝」に関連した章段（150 151 152 153）や万葉集所載歌にもとづく「生田川」（147）（浅香山）（155）の章段が、六歌仙以前の歌がたりとして残る。そのほか、無名の男女を主人公にした章段（148 149 154 156 157 167 169）も明証はないが、いくつかは六歌仙以前の平安朝初頭の歌がたりの姿を伝えている。伊勢物語以前の歌がたりとみられる冒頭部分を引用してみよう。

昔、奈良の帝につかうまつる采女ありけり。（百五十段）

同じ帝、立田川の紅葉いとおもしろきをご覧じける日、人曆

……（百五十一段）

昔、津の国にすむ女ありけり。（百四十七段）

昔、大和の国葛城の郡にすむ男女ありけり。（百四十九段）

伊勢物語と同じく、時を「昔」とし、無名の男女が登場している。これが、和歌がふるわなかった国風暗黒時代における歌がた

りの実態ではないのだろうか。晴の歌が作られることはなく、葵の恋の歌が人々によまれていたが、専門歌人の活躍する場もなく、新しい和歌が創作されることもなかったため、人々が恋の歌をよむ場合も、前代のすぐれた歌人の作った典型にもとづいてよむはかばかしくなかった。歌がたりは前代を継承してさかに行われたが、前代の歌人の作ったパターンにそって歌をよみ、当代をリードする歌人をもたぬ時代には、当然、過去が歌がたりの対象になり、彼らの利用する典型を作った人麿のような歌人が尊敬され、ときには仮託されて歌がたりの登場人物となることもあったが、一方では、葵の歌の時代であり、個人の抒情は軽視され、個性的な歌人の出現することもなかったため、歌がたりの主人公は無名の男女とならざるをえなかった。時を「昔」とし、人物をとくに著名な歌人か無名の男女とするとき、時は、平安時代をさかのぼって「奈良の帝」の御時となり、無名の男女を紹介するには彼らの住所で規定するために、古歌のふるさと「大和国」が多数の歌がたりの舞台となったのである。

もはや、大和物語の意味は明瞭であろう。いつ、どこで、だれがこの歌をよんだかを物語るとき、それは、奈良の帝の御時に、大和国で……という歌がたりが多数をしめ、平安人の古都へのノスタルジーをかきたてたことであろう。これらの歌がたりを、「大和の物語」「大和物語」以外に彼らは何とよべよう。国風暗黒時代を背景としてある一時期、歌がたりを「大和物語」とよんでいたことは、想像して誤ることはあるまい。清輔の「その名目は何語の由か」は正しい推測であった。伊勢物語の作者のまえに

は、この種の「大和物語」があつたのである。作者は、「大和物語」の新作を思い、中国艶情小説を「大和物語」に翻案し、新しい不思議な恋を描き、一部の書をあもうとした。そしてその物語を「ひがごと」と謙遜し、「大和物語」の名称に関連させて伊勢物語と命名したのであらう。伊勢物語の名は歌がたりを意味する「大和物語」と翻案や創作を「ひがごと」とする自覚なしに存在することはない。「狩の使」は会真記の寺院での恋を伊勢の斎宮での禁断の恋としたが、この改変は、伊勢物語の名称を十分に意識してのことであらう。書名がさきにきまつてのちに書く物語を規制するというのは、奇妙なことだが、伊勢物語という名称と斎宮での恋は、同時に作者の脳裡にうかんだということはある。書名があつたということは考えにくい。推測を重ねることになるが、「狩の使」は作者の初期の愛着を持った作品と思われるので、あるいは、会真記の影響をもつと濃厚にとどめるある地方の寺院の西廂での恋を、一部の書物にまとめるとき、書名にあわせて斎宮との恋に改めたのかもしれない。しかしこれは根拠のない臆測である。

以上、本稿は、「狩の使」が元稹の会真記の翻案であること、歌と物語との双方に会真記の認められるので、「狩の使」の作者は業平であること、この物語が中国艶情小説を歌がたりで翻案したという点で、伊勢物語執筆の態度や方法をもっとも明確にうかがわせること、また、伊勢物語という名称は、当時、歌がたりを意味した「大和物語」の名称を意識して命名されたもので、「狩の使」の創作・翻案の態度と共通しており、業平によって名づけ

られたであろうということ、伊勢物語という名称がどの部分をさすか、二条后関係の章段を検討したうえで決定したいが（おそらく、「昔、男ありけり」ではじまる物語を一括して伊勢物語とよんだのではなからうか）、「狩の使」が存在したために、伊勢物語とよばれたのではなく、むしろ、斎宮での恋は名称に制約されることもあったであろうことなどをのべようとしたのである。な

お、伊勢物語の影響により、また、専門歌人が新しい晴の歌をつくる和歌史をうけて、歌がたりは、同時代のさまざまな歌人の逸話を語るようになり、歌がたりは大和と疎遠になり、「大和物語」の意味も忘れ、普通名詞の「大和物語」（つまり歌がたり）から、「大和物語」をあつめたある一冊の書物を意味する個有名詞の『大和物語』に変化したのである。

新刊紹介

松野陽一・久保田淳校注

千載和歌集

千載集は八代集の一つでありながら、正保四年版本と八代集抄本が活性化されたのみの不運な歌集であった。松野・久保田両氏の十年にあまる千載集や俊成の研究を集約した本書の出現は学界の慶事である。

本文は伝本中古体をつたえる静嘉堂文庫所蔵の伝冷泉為秀筆本を底本とする。読みやすさが考慮され、漢字をあて、ふりがなを加えるが、括弧等の使用によって底本の表記に復原することも可能である。この周到な配慮は、底本における補入・改訂・校

合異文・ミセケチにまでおよび、一切を巻末の「原状」の部分に一括して掲げている。

注は頭注でまず、出典となる歌書の書名・部立・詞書および本集との字句の異同を詳しく掲げ、ついで地名・人名を注し、さらに、本歌や類歌を参考にあけて理解をたすける。「補注」においては、散佚歌会や伝承歌について多くの考証をし、専門的な問題を論じている。

巻頭の解題は、「成立過程について」「伝本について」「主要作者と選歌に見られる意識」「部立の問題」「文学的特質」にわかれている。千載集の私撰段階の存在・勅撰段階や最終的奏覧をめぐる諸問題を論じた部分や百本におよぶ伝本を成立過程に関連して四類に分類した部分は、種々の面がくばられ、重厚であるが、また明解さを

失わない好論である。

巻末には、「原状」「補注」のほかに、参考資料として「日野切本文集成」「校異」「作者略伝」「初句索引」を附している。日野切は今日知られている七十一葉のすべてを集成し、「校異」は代表的伝本である陽明文庫蔵一冊本・書陵部蔵二冊本・書陵部蔵伝堀河具世筆八代集本・書陵部蔵十一冊八代集本・八代集抄本との校異をしるして六冊分のはたらきをさせ、「作者略伝」は現在の研究の成果をとりいれ詳細であるが、また、作者別索引をかねて便利である。（昭44・9、笠間書院刊・A5判三六〇頁・笠間叢書17・一五〇〇円）